

# 南部タンザニアの僻村における在来稲作に関する研究

## ——イネの多様な栽培品種に注目して——

平成 17 年度入学

派遣国：タンザニア連合共和国

原子 壮太

キーワード：僻村、在来農法、米食文化、品種多様性

### 対象とする問題の概要

東アフリカでは、現在コメが基幹作物のひとつとして栽培されており、特にタンザニアのコメ生産量は東アフリカ諸国の中でも、もっとも高い水準にある。彼らの栽培するイネの品種はアジアイネ *Oryza sativa* であり、星川(1985)によると、その歴史は紀元前にインドから海路伝播したことにさかのぼるといふ。タンザニアでは、コメは他の作物とは異なり、市場で品質に応じた価格設定がなされている。また、商品のにおいをかぐことがタブーとされるタンザニアにおいて、コメは品質を確かめるためににおいをかぐことが許されている唯一の作物である。このように、タンザニアのコメは経済性だけで評価されるべきものではなく、その社会的、文化的な価値にも目を向ける必要がある。これまで湿地や氾濫原を中心として各地にコメ産地が形成されていることは注目されてきたが、その周辺の山間地には、流通から隔絶された僻村が点在しており、そこでは多様な在来品種をもちいた自給的な稲作が営まれていることはあまり報告されていない。

### 研究目的

本研究は、稲作を基幹生業とする僻村を対象として、①コメにまつわる文化、②栽培品種の多様性、③稲作体系に注目しながら、人と稲作とのかかわりを生態と社会の両視点から検討することを目的とする。本報告では、このうち①と②を中心に述べる。

### フィールドワークから得られた知見について

調査はタンザニア南部、ルブマ州のイフィンガ村(以下、イフィンガ)で実施した。イフィンガは、グレート・ルアハ・エスカープメントの裾野に位置し、標高 600~900m の丘陵地にふくまれる。12 月~5 月の雨季には、1200~1400mm 以上の降雨があり湿潤である。人口は 2143 人、世帯数は約 300 世帯で、主にバントゥー系のベナ・マンガと呼ばれる人びとが居住している。彼らは、丘陵地形を利用し斜面地



図 1 耕作地の景観

では焼畑を、年中、湛水状態にある谷底湿地では水利制御をおこなわずに「湿地畑」を開墾し、それぞれでイネを栽培している(図1)。



図2 炊飯(蒸らしの工程)

### ① コメにまつわる文化

イフィンガではコメは主食にされる他、焼米、パン、練り粥、しとぎ、酒、清涼飲料水など多様に調理・加工される。タンザニアでは、一般にコメを炊くとき蓋の上にオキをのせて蒸らすのが、イフィンガではオキのせに適した専用の蓋も作られている(図2)。粃摺りと精米作業には子供から大人まで男女を問わず従事し、各家には家族一人ひとりの体にあった米搗き用の杵や臼が用意されている。

### ② 栽培品種の多様性

イネの栽培品種は少なくとも40にのぼった(図4)。人びとは、形態や生育の早晩、生産性、耐乾性、そして食味や経済性などの様々な特性に基づきながら品種を識別していることがわかった。各品種は固有の機能を有しており、人びとはそれらを複数選択し栽培することで、自給と換金に必要な収穫量を確保していたのである。

各品種の栽培世帯頻度を調べた結果、大きなばらつきがみられた。また、2年間の栽培品種の構成を97世帯について比較したところ、74パーセントの世帯が親戚友人との交換を通して少なくとも1つは栽培品種を変更していた。このような品種の多様性は、特定の世帯が同じ品種を常時保持すること、またそれを相互に交換することをおして地域のなかで維持継承されているのである。



図3 米搗き臼

：獣にかみ切られたイネの茎を三つ編みにして臼の胴に巻き付けると、獣害を予防できるといわれる

### 今後の展開・反省点

今後は、イフィンガの生業、文化、経済に関して得た情報を整理し、イネと人との関わりをより多面的に描くことを主題として予備論文を執筆する。また、今回の調査期間では、実際に栽培品種の変更をおこなう場面をみることができず、栽培品種を変更する理由は

聞き取りに頼るしかなかった。このため、本報告では、世帯間を品種が移動するという現象の記述にとどまらざるを得なかった。今後の調査では、品種の選択に関してより詳細に理解するため、品種の変更や維持が決断される理由やプロセスについて、それが実践される場に立ち会い参与観察によって多くの事例を収集する。



図4 イネの栽培品種の一例

### 引用文献

星川清親. 1985. 『新編 食用作物』養賢堂.